





# 短袴流行的の御蔭で 生糸が好況になつた

脚をめかす紺靴下の需要増加で

（歸朝した田財務官の話）

前漢税關長松本修氏と交代に先づ當局は前駐米官田昌氏は最近頻々として財務官田昌氏は最も頻々として彼の往来に關し左の如く語つてゐる、近頃似に殖（いた）生絲の注文を見て直ちに米國が好況を示してゐるもゆだと速断するは甚だ軽率な觀方であつて米國もとも同じ世界的不景氣風での御相伴はしてゐるが何と云つても彼の間に比較にならぬ貿易の間隔があるが爲に商品も可成り動くのである其の一例として日本は米國の沿岸に殖民

（撮影宮殿下に謁見を賜つた米人記者歸米）

（日本は從來採り亦つたアシダ大

陸の武略の優異が誤つてゐる事

彼の勢力を集中して米國沿岸待に

（華州及びカリオニア）

の植民に熱中してゐるとは過去

五ヶ月の東洋観察を終て二十

日沙港入港のバイン・タリー

（アシダの國）

にて一事の演説を試むるの

光輝に接したのに拘らむ其觀察

は頗る浅薄

（赤毛布）である例

（日本は米戦争に關して曰く）

（日本が日本軍の宣傳をして云ふ）

（これは之れが準備をしたと云ふ説は一種のフランチ）

（日本が日本軍の宣傳をして云ふ）

# 金色の園



初夏の墨國  
萩田墨巣

唯一人（第六演兵）平洋生

十年のわが文壇を顧みて言は滋きに夜ぞくだちける  
もろ／＼の敵を邀へて闘ひし翁六溪すこやかに見ゆ  
六深の濃き眉の毛の姫さもいよ／＼著るく夜ぞくだちゆ  
若の花のきんきん聲のなは若き女將の夏が立居振舞  
青空に身をふるはして啼雲雀の女のしさも夏に若めや  
若かりし詩人論客皆遠しに夏に逢へば過さし日思はゆ  
春の家のなかみた夏が笑ひ聲嘶り騎に似てぞ駆

花牡丹山崎脚踏

朝にげに咲きし真紅の牡丹花を摘みたる人今ははるけし

君戀し牡丹の花の真盛りに咲けるを見つと思ひぬつゆる

自分に生ふるま草のうこかし黄ばじ見れば夏は來にけり

月は西に陽はひんがしの空高く舞ひ飛ぶ鳥を慕ひしてぞ見る

花牡丹庭に咲けり三十路なる吾れにひまつての愛ひ聲嘶り

度靜子と云ふ處女の存在を知つてからと云ふのは、總てが初

き詰めた心持ちはならぬとも思ひておはづかしに思ひぬつゆる

彼夫は、これまで處女の戀を経験してしまつたの

心は餘り小心で臆病故ではなからうか、又あまり自分自身を

守り下し過ぎてゐる故ではなからうか、と考へた。何もこう物

ごとを大袈裟に考へて、直ぐく思ひ出でた。併しがら、さうした漠然とした心持ちは到底動かす

その結果、未だ現れる所は、總てが初

切妥安を許さなかつた。ものは

自分の方へも発達して往くかも

たら自分は今一種の獨斷に陥ら

てゐるのであるまいか？と思つても、これは、これほんとうに思ひ出でた。併しがら、さうした漠然とした心持ちは底

然とした未來の希望や、單なる

懐疑は痛切に當面の問題を解決

する鍵にはならなかつた。否、

さうする餘裕さへ無かつたので

ある。彼はそれだけ一生懸命であつた。ちがひは、龍夫が此の花屋へ戻れて來る前の、あの漂泊の生活を想ひ出した。勿

もこので龍夫は静子の存在を知り

らぞにいた頃、つまり龍夫が此の花屋へ戻れて來る前の、あの漂泊の生活を想ひ出した。勿

もこので龍夫は静子の存在を知り

らぞにいた頃、つまり龍夫が此の花屋へ戻れて來る前の、あの漂泊の生活を想ひ出した。勿

もこので龍夫は静子の存在を知り

らぞにいた頃、つまり龍夫が此の花屋へ戻れて來る前の、あの漂泊の生活を想ひ出した。勿

もこので龍夫は静子の存在を知り

らぞにいた頃、つまり龍夫が此の花屋へ戻れて來る前の、あの漂泊の生活を想ひ出した。勿

もこので龍夫は静子の存在を知り

（先週の文藝開演より）  
本當に！ 龍夫は自分がこんな事に！ 人が死んで、ひどく懊惱したる自分が餘り小心で臆病故ではなからうか、又あまり自分自身を

守り下し過ぎてゐる故ではなからうか、と考へた。何もこう物

ごとを大袈裟に考へて、直ぐく思ひ出でた。併しがら、さうした漠然とした心持ちは底

然とした未來の希望や、單なる

懐疑は痛切に當面の問題を解決

する鍵にはならなかつた。否、

さうする餘裕さへ無かつたので

ある。彼はそれだけ一生懸命であつた。ちがひは、龍夫が此の花屋へ戻れて來る前の、あの漂泊の生活を想ひ出した。勿

もこので龍夫は静子の存在を知り

らぞにいた頃、つまり龍夫が此の花屋へ戻れて來る前の、あの漂泊の生活を想ひ出した。勿

もこので龍夫は静子の存在を知り





青葉の櫻府で  
邦人野球大會

（略）

（略）

二五 黑河寫眞  
一街千一百十五  
隆辻便利  
丸二高島旅  
津ゼル病院  
金物類  
紀伊商  
四百三十五  
業店  
四百三十六  
備州ホテ  
安藝旅  
吉澤旅  
福岡  
防州旅  
千歳旅  
富士  
藤備旅  
肥後  
日の  
日  
蛇の目  
細川旅  
廣島旅  
岩國  
九州  
甲佐  
益城  
西村旅  
仙臺  
竹本旅  
浪花ホテ  
岡山旅  
敷島旅  
宇土  
陽明  
武田旅  
大島  
五五  
大  
北  
一六  
二七  
日本

所理院店心九院店院ヨ店舗店院ト店

お 小 夜

寺 澤 琴 風

お酌白浪

(五)



(八)

(四曜日)

宿へ着くと、哲郎はすぐ酒を呑じた。火の車のやうに、次から次と腰を壓迫してくる痛みをほんの一時でもうから忘れたと思つた。

頭がどんを痛んで、胸が焼きつくやうに苦しくとも、減少してゐる。お前はお小夜が可哀想だ。お小夜を愛してゐて、そんな事を口病に言つてゐながら

茶々々に酔つて、ホフもしないと思つた。

最善から女中が、餘の大きい京言葉でいり／＼に話しかけて

哲郎は自分の用事以外には略のやうに黙つて、只首を横に振つた。さりとて、その手は利かなかつた。

ただつて、頗り見て來たのは、馬鹿でもあるまい。

これは勿論、子と共謀の人の間で、解らないのだ。情ない男だ。ナニ嘘ではない。嘘でなければ、前の心が平氣であるなら

ほんとうにお小夜をしてゐな

いのだ。イヤ確かに愛してゐないのだ。お前は嘘を言つてゐるに違ひない。其謀の人間云へば

してた前が、お前が口病でなくを推定するに

困難を感じたが、

兩宮寫眞館

別府寫眞館

森山寫眞館

富川寫眞館

原田寫眞館

元吉寫眞館

藤森醫院

吉田寫眞館

金門商會

美以英和學校

英語教授

劉日初

Dr. LIU YIO-CHO

二八一街

新開立

皮膚病專門男女女症全治保證

監學博士

澤柳太郎

東、西、各

日本から日本へ

に進み、子中山の兩人の上に下し

て、花美登里の主人風氣知

る顔で、待合の荷物へ附かけ

ました、そして其れをなく支拂

つて、爲れた

◇勘定の事

を訊いて見る

◇紙幣の耳を捕へてくめ子に

持たしてやつたと云ふ、初手か

ら斯座だらうと想像はしてゐ

たやうなもの、今眼めあたきこ

れを聞いては花美登里の主人も

うな紙幣の耳を捕へてくめ子に

持たしてやつたと云ふ、初手か